人文地理学研究　XXVIII　49~76　2004

チェコの温泉地カルロヴィ・ヴァリの変容

呉　羽　正　昭

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　第二次世界大戦前のカルロヴィ・ヴァリ
Ⅲ　社会主義時代のカルロヴィ・ヴァリ
Ⅳ　東欧改革以後のカルロヴィ・ヴァリ
　Ⅳ－1　宿泊施設経営の変化
　Ⅳ－2　訪問客の変化
　Ⅳ－3　土地利用と景観の特徴
　Ⅳ－4　カルロヴィ・ヴァリの変化とその要因
Ⅴ　おわりに

キーワード：観光，リゾート，温泉，景観，カルロヴィ・ヴァリ

Ⅰ　はじめに

東ヨーロッパ諸国は，かつて共産主義体制のもとにあり，西ヨーロッパ諸国との交流は多くの面で制限されていた．したがって，観光旅行はいわゆる東側ブロック内で完結する場合がほとんどを占めていた（Hall，1991）．しかし，1980年代の後半に生じたいわゆる「東欧改革」とともに西側諸国との国境解放がなされた．同時に，東ヨーロッパ諸国において市場経済化がすすめられてきた．こうした動向により移動の制限はほとんどなくなり，ヨーロッパをめぐる観光の形態は大きく変化してきているといえよう．とくに，東ヨーロッパ諸国の観光地域では，著しい変化がみられるようになっている．それは，社会主義時代には観光客のほとんどが東側ブロック内から訪問していたが，改革以後は西ヨーロッパ諸国から多くの観光客が訪問できるようになったからである．

近年の東ヨーロッパにおける観光に関しては多くの研究がある．従来の研究を分析がなされた地域スケールという観点から整理すると，次の３つに分けることができる．第１に，東ヨーロッパまたはヴィシェグラード諸国といったヨーロッパ内の部分地域を対象とした研究，第２に，東ヨーロッパ内の１国レベルを対象とした研究，そして第３にある国内のある地域を対象とした研究である．

第１に関する研究としては，まずHallの研究をあげることができる．彼は，既に社会主義時代から東ヨーロッパの観光に注目していた（Hall，1991）．改革以後も当該テーマについての分析を継続しており，東ヨーロッパ諸国における改革に伴う観光の変化について明らかにした（Hall，1998）．Baláž and Mitsutake（1998）は，東ヨーロッパに訪問する観光客の行動パターンを，日本人という特定の観光客を取り上げて分析した．またJordan（1993）は，旧ハプスブルク帝国の範囲における観光客流動が，第一次世界大戦前からどのように変化したのかを明らかにした．

第２の国レベルでの研究例は非常に多い．上述のHallが編集した出版物（Hall ed., 1991）の後半には，各国における社会主義時代の観光の実状が述べられている．そのほか，たとえば，Mariot（1993）は社会主義時代のチェコスロヴァキアにおける観光地域の特徴について詳述している．当該

地域に関する改革後の状況については，Johnson（1995）がまとめている．呉羽（1998）は観光客数や宿泊施設のデータを利用し，ハンガリーにおける観光地域の変化を地域的に解明した．Williams and Baláž（2002）は，経済学的な視点からチェコおよびスロヴァキアの観光の変化について考察した．また，Langlois *et al.*（1999）は，イギリス人という特定の顧客層を取り上げ，彼らのポーランドにおける観光行動を分析した．一方，呉羽（2001）は，チェコにおける東欧改革に伴う観光地域の変化だけでなく，チェコ人による観光行動の変化を明らかにした．

このように，国レベル以上というマクロなレベルでの研究例は多いものの，ミクロな地域スケールでの研究例は比較的少ない．またマクロな地域レベルでの研究では，分析資料は主として観光客数や宿泊施設に関する統計などであり，分析対象が限られている．それに対して，ミクロスケールでの分析では，現地調査によってのみ得られるさまざまな資料からの分析が可能となるであろう．しかし，実際には，こうした分析が東ヨーロッパ諸国以外の研究者によってなされることは非常にまれである．言語の障壁によって，こうした地域スケールでの調査は困難が多い結果と考えられる．もちろん，東ヨーロッパ諸国の研究者による当該地域言語での発表論文はあるものの，英語やドイツ語で発表される研究には，こうした地域スケールでのものが少ない．

例外として，Simpson（1999）は，プラハの歴史的建造物が集中する地区において居住者だけでなく観光客による認知について分析を行った．その結果，観光客の増加とともに居住環境が悪化し，居住者と観光客の景観認知が大きく異なっていることを示した．東ヨーロッパの都市の近郊においては，社会主義時代から多くの別荘地帯が存在するが，これらの別荘地帯の特徴と展望を明らかにした研究もある（Bicík, 1996; Bicík and Fialová, 1997）．Köppen（2000）は，国境地帯における新しい観光形態として買い物・娯楽観光の存在を指摘し，ドイツとチェコの国境における特異な景観を分析した．たとえば，北ボヘミアの都市ホムトフChomutovからドイツとの国境までの道路沿い約20kmの間に，多くのガソリンスタンド，市場，レストラン，さらにはナイトクラブなどの娯楽施設が集中して立地することを明らかにした．またその利用者のほとんどはドイツ人であることを示した．

本研究は，ミクロな地域スケールでの分析から社会主義体制から資本主義体制へと政治・経済・社会的に大きく体制変化した旧東欧諸国における観光地が，どのように変化したのかを明らかにするものである．対象地域はチェコ共和国の西ボヘミア地方に位置する著名な温泉観光地であるカルロヴィ・ヴァリKarlovy Vary（ドイツ名：カールスバートKarlsbad）とした．本研究では，温泉地カルロヴィ・ヴァリの観光客，宿泊施設および景観を指標として，その変化を明らかにする．分析は，カルロヴィ・ヴァリの変化について，第二次世界大戦前，社会主義時代，および東欧改革以後に分けて行う．また東欧改革以後の東ヨーロッパにおける観光地の変化という文脈で，他の観光地との差異を検討する．さらにはヨーロッパにおける他の温泉地との違いも若干議論する．

チェコ国内には多くの観光資源が存在するが，改革以後，首都であるプラハへの観光客数の集中が著しい（たとえば呉羽，2001）．その一方で，温泉も重要な観光資源となっている．チェコ国内には広く温泉が分布するが，西ボヘミアのカルロヴィ・ヴァリ，マリアーンスケー・ラーズニェMariánské Lázně（ドイツ名：マリーエンバートMarienbad）およびフランチシュコヴィ・ラーズニェ

Františkovy Lázně（同：フランツェンスバートFranzensbad）の３つが著名である．観光客数や宿泊施設の収容規模などを考慮すると，カルロヴィ・ヴァリが最大である．

本研究で分析する資料は，東欧改革以前のものと，改革以後のものに分けられる．前者については，利用できる資料が非常に限れられている．またカルロヴィ・ヴァリを対象とした研究もほとんどない．例外としてKarbus（2000）がある．これはウィーン工科大学に提出された博士論文で，建築学の立場からカルロヴィ・ヴァリの景観変遷を論じたものである．本稿では，Karbus（2000）の資料に加えさまざまな年代に出版された観光案内書（Hlawacek, 1879; O.V., 1940; Linhartová *et al.*, 1968）を利用した．また若干の統計でこれを補った．一方，改革以後の分析は，主として1997年から2000年にかけて行った現地調査，およびその後収集した資料に基づいている．

第１図はカルロヴィ・ヴァリの位置を示したものである．カルロヴィ・ヴァリは，チェコの西部にあり，プラハからの直線距離は約150kmである．最も近いドイツ国境まで約30kmの距離にあり，ドイツから到達しやすいことが特徴的である．カルロヴィ・ヴァリは行政的には１つの市となっており，カルロヴィ・ヴァリという同名のオクレスOkres（郡）の中心都市でもある．本研究の分析対象地区は，カルロヴィ・ヴァリ市南部に位置する温泉地区である．以後ことわりのない限り，カルロヴィ・ヴァリという場合，この温泉地区を指す．カルロヴィ・ヴァリは，写真１のように両側を標高500mから600mの山地に囲まれ，南から北へと流れるテプラー川の谷に形成されている．また一部の宿泊施設は山地の緩やかな斜面や平坦面である高台上に立地している．温泉の源泉はテプラー川に沿って存在し，現在12の主要な源泉がある．温泉はナトリウムイオン，硫酸イオンや炭酸イオンを多く含んでいる．その温度と流出量は源泉によって異なっており，温度については約40から70℃と差がある．春から秋には多くの療養客や観光客が訪れる（写真２）．

第１図　研究対象地域

Ⅱ　第二次世界大戦前のカルロヴィ・ヴァリ

カルロヴィ・ヴァリの源泉は，14世紀に神聖ローマ帝国の皇帝カールⅣ世によって発見されたと伝えられている．しかし，温泉地として発展するのは，19世紀になってからのことである．温泉を利用した治療方法が徐々に確立されるとともに，療養客数も急激に増加していった．なかでも医師ベッヒャーDavid BECHERによって飲用法に散歩を加えた新しい治療法が提唱された（佐藤，1989）ことは著名である．Hlawacek（1879）によると，1756年の療養者数は，134にすぎなかったが，その後増加を示す．1800年には744，1850年には4,227，さらに1875年には15,642に達した．

カルロヴィ・ヴァリは多くの著名人の滞在によって，ヨーロッパでも有数の社交場として確固たる地位を築いてきた．とくに文豪ゲーテや作曲家ベートーベンの滞在はあまりにも有名である．また，19世紀末から20世紀初めにかけては，豪華な建物の建築が進行した．クアハウス（Lázne I，1895年完成，写真３），飲泉場であるコロナーダKolonáda（たとえば，ムリンスカーMlýnská・コロナーダ，1881年完成，写真４）や大規模なホテル（たとえば，ホテル・プップPupp，1905年完成，写真５～７；ホテル・インペリアルImperial，1912年完成，写真１の山腹部）がそれに該当する．第一次世界大戦直前には，世界中から7万人を超える滞在客が訪れたという（Holubcova and Krejna 1993）．

第一次世界大戦後，カルロヴィ・ヴァリはチェコスロヴァキアという新しい国家に属することになる．その中で，カルロヴィ・ヴァリはズデーテンラントに含まれ，住民の多くはドイツ人であった．1938年のミュンヘン協定によって，ズデーテンラントはドイツ第三帝国へ割譲された．この当時，すなわち1930年代終わり頃の様子を当時のドイツ語観光案内書（O.V., 1940）に基づいて記述する．

第１表は，1930年末における施設の状況を示したものである．ヨーロッパでも有数の温泉地であったことを反映してさまざまな施設の立地がみられた．ホテルは28軒存在し，そのベッド数は2,500を超えていた．とくに先述のホテル・プップとインペリアルが最大規模で，それぞれ500および344ベッドを有していた．また多くの治療設備を有するサナトリウムも７軒存在した．宿泊施設に関しては，下宿Fremdenheime形態をとる施設が多く存在することが特徴的である．さらにその８割以上に該当

第１表　カルロヴィ・ヴァリにおける諸施設（1930年代末）

種　類	施設数	うち通年営業施設	ベッド数
ホテル	28	10	2,525
サナトリウム	7	2	331
賄い付き下宿	17	8	894
下　宿	96	26	3,412
食堂兼旅館	10	2	132
レストラン	16	－	－
喫茶店	13	－	－
合　計	187	48	7,294

資料：O.V.（1940）

する96軒は部屋貸しの形態で，残りは賄い付きであった．前者では，多くの場合，ホテルに滞在する費用の半分以下で利用可能であった．こうした比較的安価な宿泊施設の存在は，より広い社会階層からなる療養客や保養客の利用を促進させたものと考えられる．第2図はこれらの宿泊施設の分布を示したものである．大規模ホテルを除くほとんどの宿泊施設の住所（通り名称および番地）はO.V.（1940）で把握できるものの，地図上での正確な位置が不明であるため，この分布図は大まかな位置を示すにすぎない．ホテルの多くはテプラー川に沿って立地していることが把握できる．それに対してサナトリウムはテプラー川両岸の高台に位置するものが多い．また下宿は，広く温泉地区に存在するものの，特定の通り沿いに集中して立地している．宿泊施設のほかに，食堂や喫茶店も多く立地したことが把握できる（第1表）．1930年代末，これらの宿泊施設全体での収容規模は，約7,300ベッドにも達していた．これは，後述する社会主義時代および東欧改革後と比較しても遜色ない規模であった．

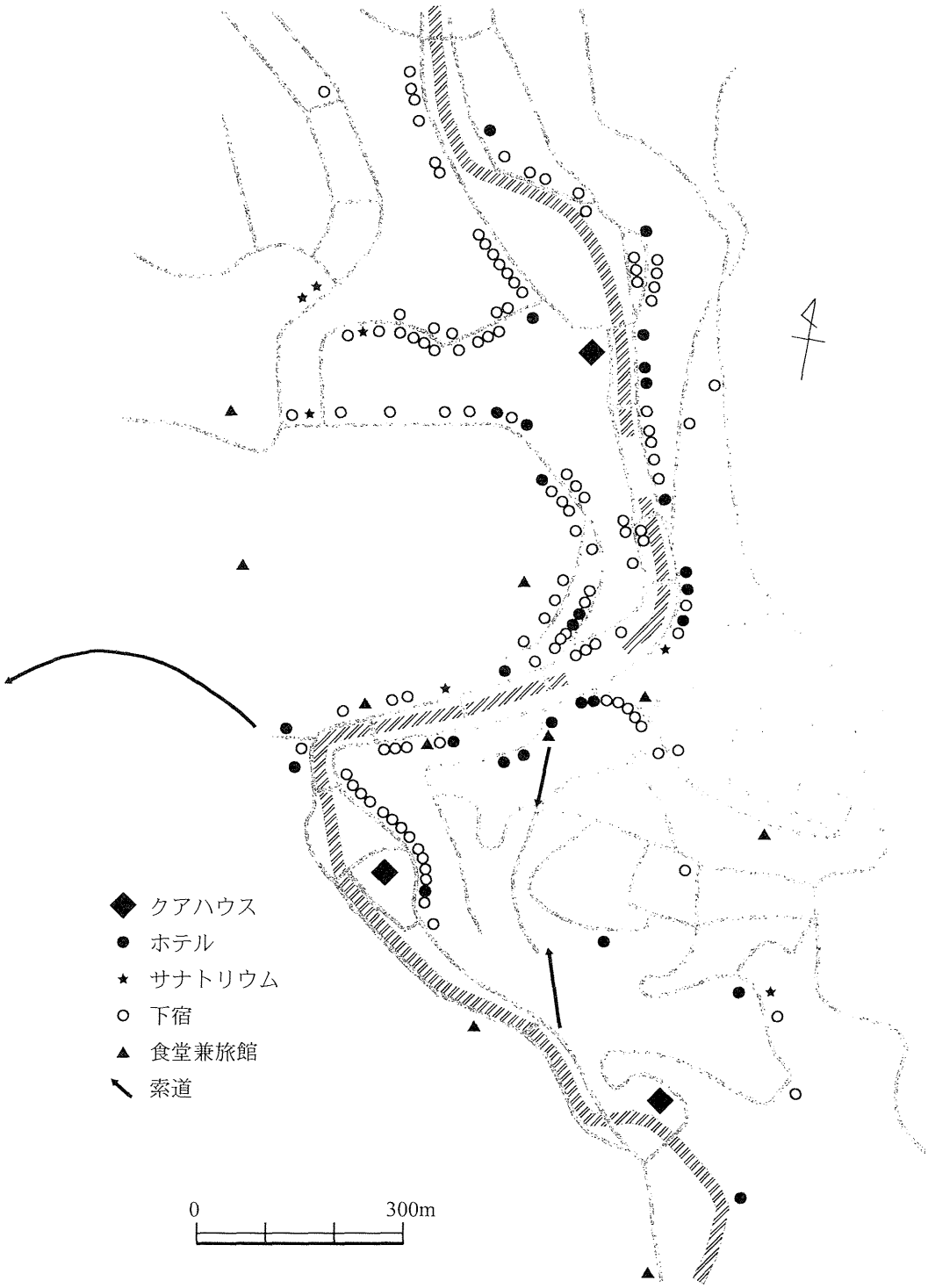
また当時，治療の際に散歩が重要視されたため，テプラー川両岸の高台には多くの散歩道が整備された．さらに谷底と高台を結ぶ索道が3か所存在した（第2図）．宿泊施設と飲食店に関しては，温泉地区以外にも若干存在し，温泉地区の北部に位置する駅周辺地区に集中していた．

Ⅲ　社会主義時代のカルロヴィ・ヴァリ

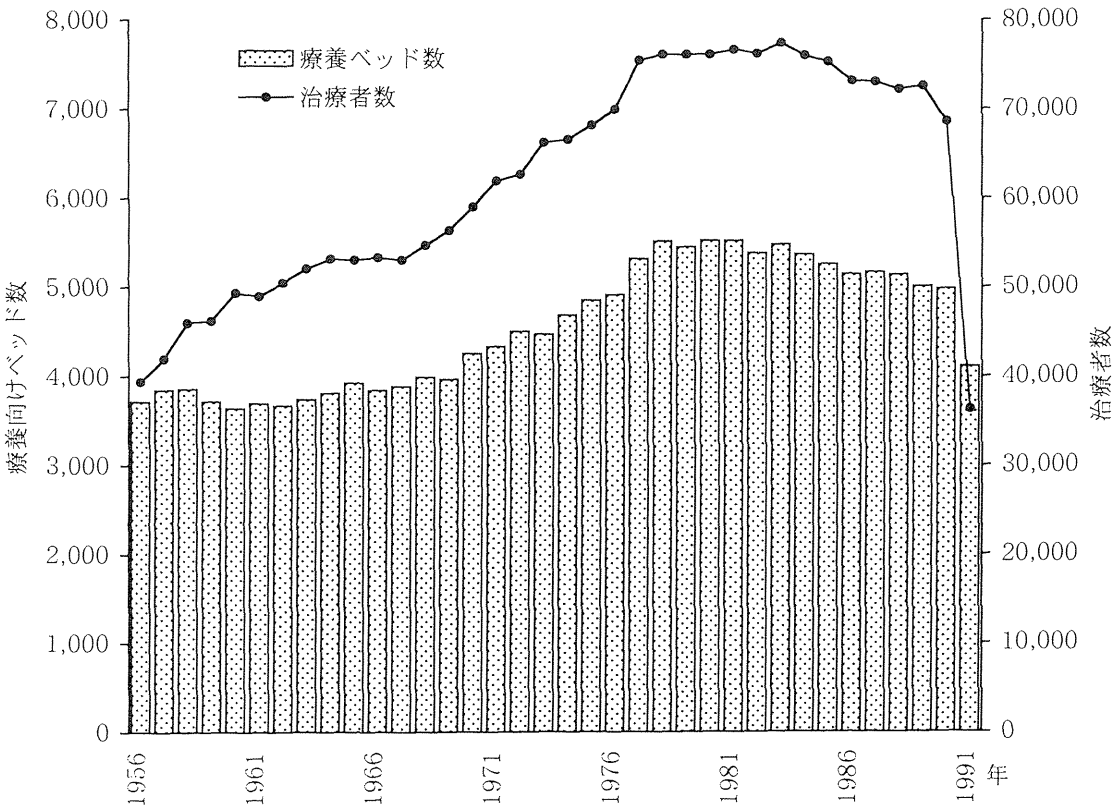
しかし，第二次世界大戦後，カルロヴィ・ヴァリをめぐる状況は大きく変化する．まず，この地も含まれるズデーテンラントからドイツ人が退去し，その後，チェコ人・スロヴァキア人の移入政策がとられた．またその後，チェコスロヴァキアが社会主義国家となり，温泉源泉，サナトリウムやホテルをはじめとする宿泊施設の国有化が進んだ．ホテルやサナトリウムの多くは，第二次世界大戦前まではドイツ人の所有であったが，国有もしくは労働組合所有のホテルやサナトリウムへと形態を変化させていった．たとえば，ホテル・プップは国有ホテルとなり，名称もホテル・モスクワへと変化した．またホテル・ブリストルBristolは共産党首脳関係者の専用の高級サナトリウムSANOPZへと形態を変化させた（Zlamal，1997）．こうした状況下，かつての「社交場」としての機能は大きく縮小していった．それに代わり療養機能が中心的な役割を担うようになった．

第3図はカルロヴィ・ヴァリにおける療養施設のベッド数と療養客数の推移を示したものである．1960年時点での療養用ベッド数は約3700，利用者数は約5万程度であった．また診療日数はのべ110万日程度に達していた．これらの利用者数および診療日数はともに増加を続け，1980年代半ばにピークを迎える．すなわち，1983年には，約5500ベッドを7.7万人が利用し，診療日数はのべ約170万日に達した．こうした療養者はカルロヴィ・ヴァリに平均して3週間程度滞在し，その85％は健康保険が適用されたチェコ人が占めていた（Holubcova and Krejna，1993）．彼らは，ほぼ無料で治療滞在することが可能であった．また自費のみで滞在したチェコ人も5％存在した．このようにチェコ人が卓越する一方で，外国人療養客は10％程度に存在したにすぎない．療養者の治療目的の1/3は筋肉系の運動障害，1/5は消化器障害，1/8は心臓血管障害が占めていた．

こうした療養客に加えて，一般の観光客の訪問もみられた．すなわち1970年代および1980年代を



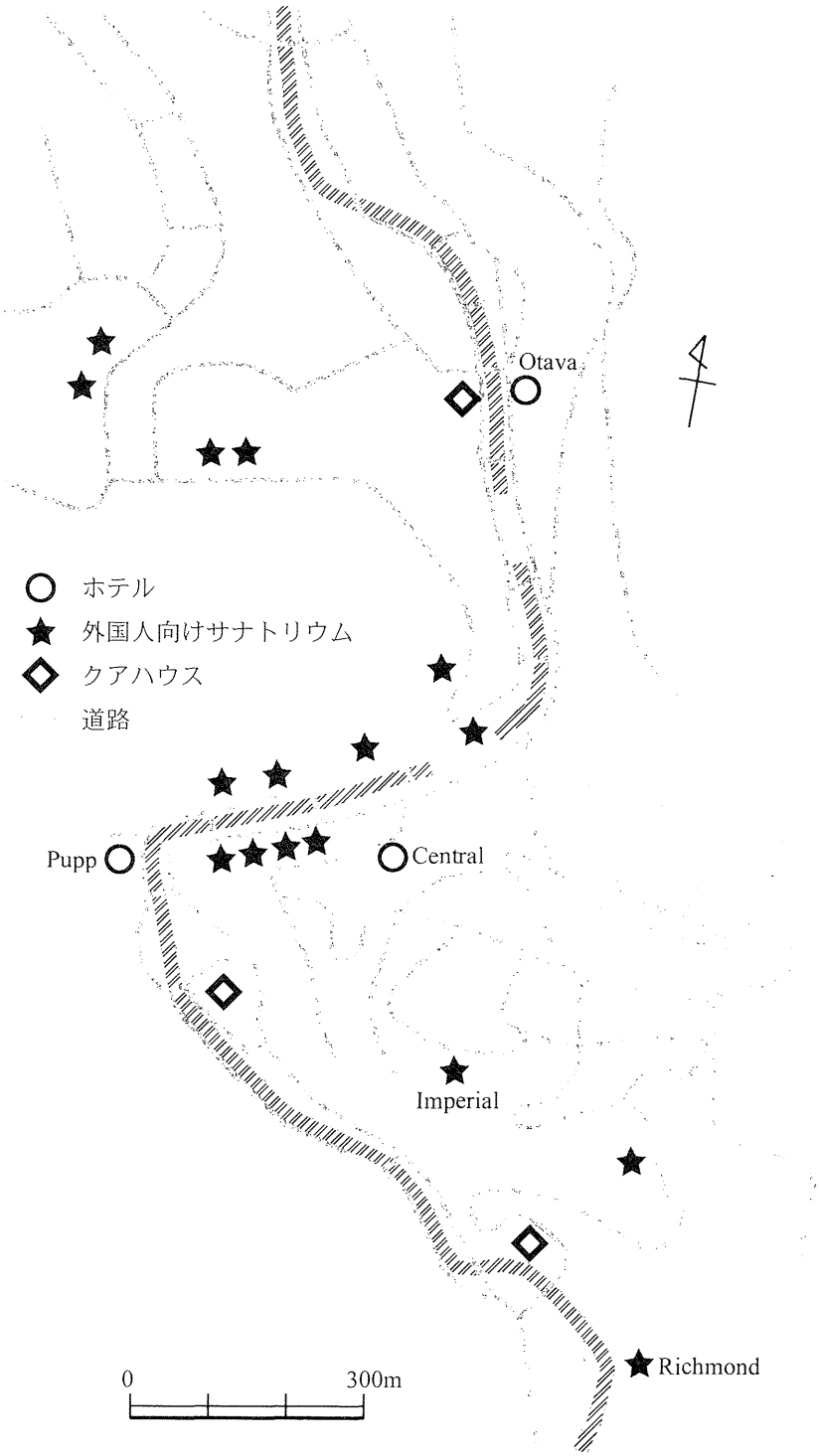
第2図　カルロヴィ・ヴァリ温泉地区における宿泊施設（1930年代末）
注：宿泊施設の所在地は住所表記形態でのみ把握可能なため，地図上での位置は必ずしも正確ではない。
資料：O.V.（1940）



第3図　カルロヴィ・ヴァリにおける療養ベッド数および治療者数の推移（1956-1991年）
資料：Federalni Statistický Úřad, Česky Statistický Úřad, Slovensky Statistický Úřad (1990-1992): *Statistická ročenka České a Slovenské Federativni Republiky*. Praha.
Statni Úřad Statisticky, Československé Socialistické Republiky (1955-1989): *Statistická ročenka Československé Socialistické Republiky*. Praha.

通じて，訪問した観光客数は年間約15万から20万人程度であった（Zlamal，1997）．その約半数は外国人が占めていた．その発地に関するデータはないものの，当時の状況から判断すると，東ドイツをはじめとする社会主義ブロックがほとんどであったと推察できる．しかしながら，こうした観光客の宿泊数は平均で2泊から3泊にとどまっていた．すなわち，療養客数に比べ観光客数は2倍程度あったものの，滞在日数を考慮すると，療養客が非常に多かったといえる．

1968年にドイツ人向けに刊行された観光案内書（Linhartová，1968）をもとに1960年代後半の様子を説明する（第4図）．温泉地区に存在するホテルは3軒，サナトリウムは16軒であった．ただし，後者の数は外国人が利用可能な施設のみを示した数である．上述のブリストルなどはチェコ人専用であったため，この数値には含まれていない．ホテルには，上述のプップ（320室），Central（71室）およびOtava（77室）があり，いずれも第二次世界大戦前から存在していたものである．16軒のサナトリウムには前出のインペリアルを始め，リッチモンドRichmondなどが含まれていた．1930年代末には，これ以外にも多くの宿泊施設が存在していたが，その多くは労働組合所有の保養所へと形態変化したと思われる．資料は存在しないものの，労働組合所有の保養所はかなりの規模に達して



第4図　カルロヴィ・ヴァリ温泉地区における宿泊施設（1960年代末）
注：共産党関係者や労働組合関係のサナトリウムは含まない。
資料：Linhartová *et al.*（1968）

いたことが推測される．また，1930年代当時下宿形態であった施設は，住民の住居としても利用されたと考えられる．

その後，いくつかの施設の改築や新設がなされた．1971年には，テプラー川右岸の高台中腹にホテル・サンスーチーSanssouci（1979年当時で247ベッド，写真８）が建築された．温泉地区中心部に位置するヴジーデルニーVřídelní・コロナーダは，1975年に全面改装された（写真９，10）．また1976年には，会議場，レストラン，映画館や水泳用プールなど多様な設備を有するホテル・テルマルTermalが完成した（写真11）．テルマルは13階建てで，533ベッドを有する大規模なホテルであった（Karbus 2000）．これらの景観は，19世紀末に流行したネオ・バロックを中心とした建築様式ではなく，社会主義の象徴ともいえる機能優先の思想が反映されたものであった．

Ⅳ　東欧改革以後のカルロヴィ・ヴァリ

本章では，東欧改革以後の状況について記述する．チェコにおいて1989年に始まるヴィロード革命は，カルロヴィ・ヴァリを大きく変化させることになった．その変化は，多くの国有施設やサービスの民営化，および国境開放による自由な観光客流動の発生に基づいている．

Ⅳ－１　宿泊施設経営の変化

チェコにおいて国有施設の民営化は，1992年から始まった．この過程で，温泉源泉はカルロヴィ・ヴァリ市の所有となった．またホテルなどの宿泊施設も全て民営化されている．その際，チェコ国内の資本だけでなく，ドイツやロシアからの資本によっても民営化が進んだことが特徴的である．1992年当初は，６つの大規模な株式会社によって宿泊施設等の所有が進んだ．その後は，他のさまざまな会社が設立され，上記の６つの会社から施設を購入する場合が増えている．しかし，1990年代末にも一部のホテルは少数の投資家によって所有されている．たとえば，先述のブリストルは６つのホテルからなるブリストルグループを形成しており，主な資本としてプラハにある銀行が参加している．また，ホテル・インペリアルの経営会社は，ホテル・サンスーチーも所有している．

宿泊施設における民営化の実態を２つのホテルの例からみていこう．ホテル・セントラル（写真12）は，温泉地区の中心部にあり，ヴジーデルニー・コロナーダの南西に位置する．社会主義時代から存在するホテルである．1992年の民営化開始後，所有者の変更が複数あったものの，1997年にホテル・プップのグループからホテルを買収した．ロシア人の投資家による資本参加がある．1999年には，65部屋に120ベッドを所有し，従業員数は45名であった．一方，ホテル・ドヴォルザークDvořák（写真13）は，上述のセントラルのやや西に位置する．もともと小規模なホテルであったが，1988年に隣接する３つの建物をとりこみ大規模化を計画した（Karbus，2000）．この計画は1990年に完成し，79部屋158ベッドを有するホテルとなった．その後，民営化の過程でオーストリア資本が参加し，ウィーンにあるホテルチェーンVienna International Hotels & Resortsの傘下に入った．

このような既存の宿泊施設においては，民営化と同時に客部屋など施設内の設備の改良が進行している．その結果，設備の程度は西側の標準にほぼ近づいている．しかし，それとともに宿泊料金

の高騰もみられる．また一部のホテルでは，新たに温泉の配管設備を設置し，浴用療養施設を設けている．たとえば，上述のホテル・セントラルは1997年に新会社による経営となって以後，客部屋の改装を進め，また1999年に療養施設を完成させた．

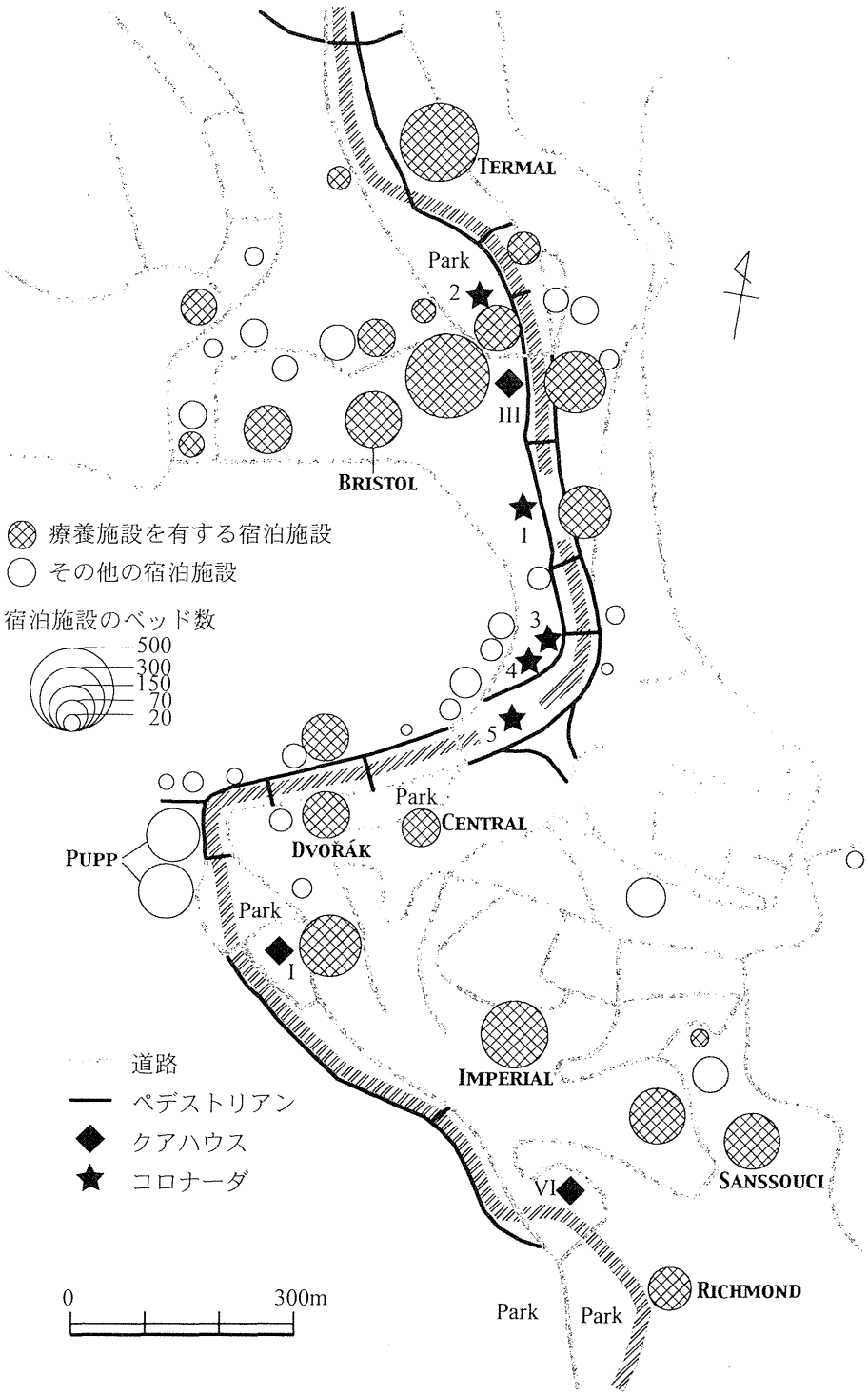
こうした既存ホテルの民営化や変化に加えて，改革以後，新たに多くの宿泊施設の建設が進行している．カルロヴィ・ヴァリにおける宿泊施設は，2000年現在，市の観光協会に登録されている宿泊施設のみで53存在し，そのベッド数は5,800に達する．このベッド数は，第二次世界大戦前よりも少ない．また，53軒のうち29軒は，改革以後に新設されたものである．新設施設におけるベッド数は1,370にすぎない．ただし，市の観光協会に登録されていない宿泊施設も若干存在する．それは，ペンションを中心とした小規模な宿泊施設である．また，温泉地区以外にも，カルロヴィ・ヴァリ市内中心部や周辺部に宿泊施設が立地している．

次にこれらの宿泊施設の特徴を述べる．第2表はカルロヴィ・ヴァリにおける宿泊施設の特徴を示したものである．ベッド数からみた規模に注目すると，全体的には小規模な宿泊施設が卓越している．この傾向は，上述のように，とくに改革以後に新設された施設で顕著である．星の数から宿泊施設のランクをみると，改革以前からのホテルでランクが高くなっている．またそうした施設の多くは療養施設も所有しており，クレジットカードでの支払いも可能であるなど，高級なホテルとしての性格を有している．第5図は，宿泊施設の分布を示したものである．宿泊施設は，テプラー川に沿った地区，南部の高台地区，および北部の高台地区に集中して立地している．またこの図に

第2表　カルロヴィ・ヴァリにおける宿泊施設の概要（2000年）

指　標	分　類	社会主義時代からの宿泊施設	改革以後の新設宿泊施設	合　計
ベッド数からみた規模	300 −	3	0	3
	200 − 300	7	0	7
	100 − 200	7	2	9
	50 − 100	3	6	9
	30 − 50	4	7	11
	− 30	0	14	14
	合計	24	29	53
星数からみたランク	5	1	0	1
	4	9	4	13
	3	13	14	27
	2	0	3	3
	1	1	0	1
	0	0	8	8
	合計	24	29	53
カード支払い	可	21	17	38
	不可	3	12	15
	合計	24	29	53
療養施設	有	19	4	23
	無	5	25	30
	合計	24	29	53

単位：軒
（カルロヴィ・ヴァリ観光情報局（Městská informační kancelář）資料により作成）



第5図 カルロヴィ・ヴァリ温泉地区における宿泊施設（2000年）

注：クアハウスの数字はその番号を示す。またコロナーダの数字は，1. Mlýnská Kolonáda，2. Sodová Kolonáda，3. Tržní Kolonáda，4. Zámecká Kolonáda，5. Vřídelní Kolonádaをそれぞれ示す。

（カルロヴィ・ヴァリ観光情報局（Městská informační kancelář）資料および現地調査により作成）

は，源泉につくられたコロナーダ，療養機能を備えたクアハウスの分布も示されているが，それらはテプラー川に沿って存在している．

宿泊施設の民営化に伴って，その経営は大きく変化した．社会主義時代には，サービスなどの経営戦略は全く不要であったが，民営化後，施設独自の経営戦略が集客にとって重要な地位を占めるようになった．先に述べた宿泊施設における浴用療養施設の設置はその例であろう．その他の集客戦略として，さまざまな滞在パッケージの開発が進んでいる．とくに女性向けのパッケージが重要視されており，エステティック向けや，ダイエット向けなどがある．もちろん後者の場合，食事内容やカロリー量が考慮されている．また高齢者向けのパッケージにもさまざまなものがある．短期滞在向けや2週間程度の滞在向けなどのパッケージがある．価格には，ホテルや部屋の種類，サービスの内容によって大きな幅があるが，4星クラスのホテルでシングル・ルーム滞在の高齢者向けパッケージで，1日あたり100ユーロ未満である．ツインルーム滞在ならば，料金は2割程度安くなる．

Ⅳ－2　訪問客の変化

改革の進行とともに訪問客も大きな変化を示している．第3表は，療養客数の推移を示したものである．これによると，近年4万から5万人前後を推移している．療養客数は改革直前には約7万人存在したことから，その減少が認められる．さらに滞在期間減少も顕著である．改革以前には平均して3週間の滞在が主体であったが，改革以後では，2週間の滞在が平均的である．チェコ人の場合，保険を利用した療養が可能であるが，社会主義時代に比べて，その審査は厳しいものとなっている．もちろん外国人については，保険を適用しての療養は不可能で，すべて自費により賄われている．療養客はクアハウス（写真14，15）で，または療養施設を有する宿泊施設で，医師の診断に基づいて治療を行う．

療養客の減少とは反対に，観光客数は増加傾向にある．ここでいう観光客とは，療養行為を行わなかった滞在客のことを指す．カルロヴィ・ヴァリには毎年20万人程度の観光客が訪れている．彼らの場合，滞在日数が短く，平均で2泊から3泊程度にとどまっている．このほか，ドイツからの日帰り客も多く認められる．

第3表　カルロヴィ・ヴァリにおける療養客数の推移（1993-1999年）

年	療養客数（人）			割合（%）	
	外国人	チェコ人	小計	外国人	チェコ人
1993	14,457	21,989	36,446	39.7	60.3
1994	18,596	21,962	40,558	45.9	54.1
1995	20,875	19,413	40,288	51.8	48.2
1996	30,819	15,408	46,227	66.7	33.3
1997	32,424	17,069	49,493	65.5	34.5
1998	37,178	15,857	53,035	70.1	29.9
1999	33,054	13,478	46,532	71.0	29.0

（カルロヴィ・ヴァリ観光情報局（Městská informační kancelář）資料により作成）

観光客の出発地構成も大きく変化してきた．まず療養客について説明する．第4表は，それを国籍別にみたものである．第1にチェコ人の割合が，年々減少していることが特徴的である．改革以前には9割をチェコ人が占めていたものの，1999年では3割にまで減少している．一方，外国人療養客が増加し，現在，ドイツ人とロシア人がそれぞれ全体の約30％弱を占めている．これにイスラエルとアメリカ合衆国が続いている．ロシア人にとって，カルロヴィ・ヴァリは富裕層の保養地域として認識されている．カルロヴィ・ヴァリには小規模な空港が存在し，モスクワとの間を定期路線が週に数便運行している．このように療養客に関しては入湯税の関係から詳細なデータがあるものの，それ以外の観光客に関する国籍別構成のデータは存在しない．しかしながら，その多くはドイツ人を中心とした外国人であると推測される．

先に説明した宿泊施設の経営戦略の内，情報発信に関しては，訪問客の市場構成を反映したものとなっている．カルロヴィ・ヴァリのほとんどのホテルは，今日，インターネット上でホームページから情報発信を行っている．そのほとんどがチェコ語，ドイツ語，英語およびロシア語のページを有し，それぞれの言語で情報が存在している．もちろん，温泉地区内の案内看板やパンフレットなどの紙媒体の情報にも同様の傾向がみられる．とくにロシア資本が入っている宿泊施設では，多くの宣伝をロシアで行っている結果，ロシア人宿泊客の占める割合が大きい．滞在客にみられるこうしたロシア人の卓越傾向は，カルロヴィ・ヴァリにのみみられる傾向である．近隣のマリアーンスケー・ラーズニェやフランチシュコヴィ・ラーズニェではこのような傾向はほとんどみられない．

次にカルロヴィ・ヴァリにおける訪問客の特徴を，西ボヘミア大学が1999年に行ったアンケート調査を基に説明しよう．滞在目的で最も多いのは療養であり31％を占める．これに，日帰り観光（23％），休暇旅行（11％）が続いている．また同行者に注目すると，31％が夫婦で滞在しており，さらに一人も29％と多くを占めている．宿泊滞在者の利用施設で最も多いのは療養施設付きのホテルで39％に達する．これにホテル（25％），ペンション（13％）が続いている．このように，カルロヴィ・ヴァリでは療養目的の訪問者がかなりの割合に達する．その一方で，日帰り客の滞在も多いことが特徴であろう．

第4表　カルロヴィ・ヴァリにおける療養客数の国籍別推移（1996-1999年）

国籍	療養客数（人）				割合（％）			
	1996	1997	1998	1999	1996	1997	1998	1999
チェコ	15,408	17,069	15,857	13,478	33.3	34.5	29.9	29.1
ロシア	17,865	18,997	17,712	13,407	38.7	38.4	33.3	28.8
ドイツ	9,624	7,976	12,288	11,744	20.8	16.1	23.2	25.2
イスラエル	475	698	1,132	1,509	1.0	1.4	2.1	3.2
USA	763	1,316	1,424	1,278	1.7	2.7	2.7	2.7
ウクライナ	79	1,047	786	922	0.2	2.1	1.5	2.0
オーストリア	609	757	677	469	1.3	1.5	1.3	1.0
その他	1,404	1,633	3,159	3,725	3.0	3.3	6.0	8.0
合　計	46,227	49,493	53,035	46,532	100.0	100.0	100.0	100.0

（カルロヴィ・ヴァリ観光情報局（Městská informační kancelář）資料により作成）

Ⅳ－3　土地利用と景観の特徴

このような民営化に伴う施設の変化や観光客構成の変化によって，カルロヴィ・ヴァリの景観は大きく変化している．宿泊施設は高級化し，豪華なホテルが目立つようになった．またカルロヴィ・ヴァリにおいて，テプラー川に沿った道路沿いには観光客向けの商業機能が著しく集積している．第6図は，温泉地区のなかでもテプラー川に沿った中心部の商店機能の分布を示したものである．第5表は，それらの商業施設数を種類別に表している．分布図より，狭い範囲内に多くの店舗が集中していることが明らかである．とくに，宝石・貴金属店（写真16），西ボヘミア地方の著名な製品であるガラスや磁器を販売する商店（写真17，18），高級洋品店，履物店で全体の約半数に達する．また図中の最北部には1999年にショッピングセンターが完成した（写真19）．3階建てで51店舗か

第6図　カルロヴィ・ヴァリ温泉地区における商業施設（2000年）
（現地調査により作成）

第5表 カルロヴィ・ヴァリ温泉地区における商業施設数（1999年）

商業施設の種類	軒数（軒）	割合（%）
土産物店	12	8.2
ガラス・磁器製品店	17	11.6
宝石・貴金属店	28	19.2
洋品・履物店	26	17.8
銀行・両替所	8	5.5
飲食店	19	13.0
その他の店舗	22	15.1
空き	14	9.6
合計	146	100.0

（現地調査により作成）

らなり，洋品店や宝石・貴金属店が中心の店舗構成になっており，飲食店も存在する．この建物は1878年に完成したクアハウス（Lázně IV）であったが，社会主義時代には市役所庁舎の一部として利用され，近年，ショッピングセンターに改築されたものである．

カルロヴィ・ヴァリ温泉地区における商業施設の顧客のほとんどは外国人観光客であり，地元のチェコ人向けの施設は駅周辺に存在する．顧客の多くはカルロヴィ・ヴァリの滞在客であるが，それだけではなく，日帰りで訪れるドイツ人も多く含まれる．ガラスや陶磁器製品は，プラハでの販売価格よりも2から3割安いという．もちろんドイツとの価格差も大きい．また観光客向けの施設として，喫茶店（写真20）やレストランといった飲食サービス施設も多い．レストランは，ボヘミア料理店だけでなく，イタリア料理店，中華料理店と多様である．さらには銀行や両替所（写真21）も数多く立地している．

また景観上の特徴として，多くの空き家の存在もあげられる．カルロヴィ・ヴァリでは商業施設が卓越する一方で，空き店舗（写真22）も多く，軒数で全体の約10％を占めている（第6図）．こうした空き店舗は，過渡的な景観ととらえられる．詳細なデータはないものの，カルロヴィ・ヴァリでは改革後の地価の高騰が激しい．その結果として，宝石・貴金属店が多く存在すると思われる．その一方で，店舗の移り変わりも頻繁になされるため，空き店舗が多いと考えられる．もちろん，不動産を所有する投資家の意向・動向によって空き家となる場合も多いという．たとえば，テプラー川左岸の高台上にある建物ブルノBrnoは，社会主義時代には外国人の利用も可能なサナトリウムであった．民営化後チェコ人による会社の所有となったが，その後会社が倒産し，1999年現在空き家のままである（写真23）．建物が利用されていないため老朽化が激しい．

Ⅳ－4　カルロヴィ・ヴァリの変化とその要因

ヨーロッパには多くの温泉療養地があり，それぞれ療養客のみを対象としたものから，観光客を主たる対象としたものまでさまざまである（山村，1990）．しかしその性格は時代とともに変化する．たとえば山村（1998）は，日本の温泉地について，そのほとんどが療養型から観光型へと大きく変化してきたことを示している．

カルロヴィ・ヴァリでは，従来から上層階級の社交場・保養地としての性格を有していた．この性格は第二次世界大戦まで継続する．しかし，社会主義時代に入り，その性格は大きく変化した．すなわち，療養地としての側面が重視されたのである．もちろん，社会主義ブロック内での最高レベルの療養地としての位置づけがなされていたと思われる．1980年代後半に始まる東欧改革以後には，療養地として位置づけが後退し，第二次世界大戦前に認識されていた高級リゾートとしての性格を取り戻してきた．以下では，カルロヴィ・ヴァリにおける近年の変化の要因について検討する．

カルロヴィ・ヴァリにおける近年の急激な変化は，外的要因としては，第1に約40年間にわたる社会主義時代の経験，第2に東欧改革以後の急激な変革に基づいていると推察される．東ヨーロッパ諸国の観光地域では，1989年に開始される一連の東欧改革とともに大きな変化を示してきた．社会主義時代に訪問することが困難であった地域に，西ヨーロッパ諸国から多くの観光客が訪れたからである．また，約40年間にわたる社会主義時代の経験に基づいた西側諸国との価格差も多くの観光客の流入を可能とした．しかし，カルロヴィ・ヴァリは完全に高級リゾートに回帰したわけではなく，従前とは異なった性格も存在する．そこには，いくつかの地域的条件が関与している．

第1に交通条件である．カルロヴィ・ヴァリへのアクセスに注目すると，公共交通機関の未発達が特徴的である．鉄道路線は存在するものの，たとえばプラハからの直通列車はほとんどない．プラハからは路線バスが1時間に1本程度運行されているにすぎない．その結果，ロシア人観光客による空路利用を別にすると，カルロヴィ・ヴァリへの観光客の大半は自家用車で訪れている．これに少数の団体バス利用，路線バス利用が続いているにすぎない．東ヨーロッパ諸国において，改革以後の観光客数の急増傾向は首都で著しい傾向にある．たとえば，チェコではプラハに著しく集中し（呉羽，2001），またハンガリーでは，バラトン湖畔にも多いものの，ブダペストの観光客数が最も多い（呉羽，1998）．こうした都市観光地には文化遺産や著名な博物館が存在し，ヨーロッパ各地や全世界から多く観光客が訪れる．またビジネス観光客が多いことも特徴であろう．一方，カルロヴィ・ヴァリでは療養客や保養客といった特定の顧客層がある程度存在するにすぎない．

第2にカルロヴィ・ヴァリでは国境付近に立地するという位置条件が，改革以後の変化に大きく関連していることである．カルロヴィ・ヴァリから最も近いドイツ国境まで約25kmである．その結果，ドイツ人による週末観光地，日帰り観光地としての性格も強い．カルロヴィ・ヴァリにおける高級商業施設の集積は，この性格を反映したものであろう．また，ドイツとの国境に至る道路沿いには，Köppen（2000）が示したような施設が多く存在する．その結果，また上で述べた一般的要因としての価格差の結果として，自家用車を利用したドイツからの短期滞在者や日帰り観光客の存在が，カルロヴィ・ヴァリの大きな特徴の一つになっている．

第3に，保養地としてのカルロヴィ・ヴァリが備えるべき施設やサービスの問題があげられる．東ヨーロッパ諸国では，改革以後宿泊施設の設備やサービスは，社会主義時代に比べて著しく向上した．しかし，依然として西ヨーロッパの水準に達していない部分も多い．その結果，第二次世界大戦前の上層階級の社交場・保養地としての性格付けが若干弱くなっていると思われる．また知名度という点で，国際的なイベントの少なさも特徴の一つである．例外的に，カルロヴィ・ヴァリ国

際映画祭の開催がある．これは，1946年に開始された世界的にも最古の映画祭の一つであるが，社会主義時代には多くのさまざまな制約があり，開催されない年があった．しかし，改革以後は毎年7月上旬に開催されている．ただし今後，こうしたイベントも増加することが予想される．

従来からカルロヴィ・ヴァリにおける療養の主体は飲泉であった．カルロヴィ・ヴァリでは，源泉でカップに温泉を汲み（写真24），それを飲みながら散歩している人々を多く見かける．そのカップは，持ち手がストローのように管状になっており，そのまま飲み口になっている．その一方で，入浴療養もある程度の地位を確保している．この傾向は，改革以後の宿泊施設における療養設備の新設に表れている．しかし，カルロヴィ・ヴァリでは，ある特定の疾患に関する療養地として特化しているわけではない．カルロヴィ・ヴァリ近隣の温泉地であるフランチシュコヴィ・ラーズニェでは，訪問客のほとんどが療養目的で滞在している．またマリアーンスケー・ラーズニェでは一般の観光客も多いものの，カルロヴィ・ヴァリほどの商業施設の集積はみられない．すなわち，カルロヴィ・ヴァリは，療養というよりは保養のための目的地であり，訪問者は劇鑑賞などの文化観光，散策，買い物を楽しむといった形態が主体であり，それに社交場としての機能が付加されている．

V おわりに

本研究は，著名な温泉観光地であるカルロヴィ・ヴァリがどのように変化したのかを明らかにするものである．カルロヴィ・ヴァリの変化について，第二次世界大戦前，社会主義時代，および東欧改革以後に分けて分析し，カルロヴィ・ヴァリにおける変化にみられる特徴について考察した．その結果は以下のようにまとめられる．

カルロヴィ・ヴァリは，19世紀頃から著名な温泉地としての性格を有し，また多くの著名人の滞在によって，ヨーロッパでも有数の社交場として確固たる地位を築いてきた．19世紀末から20世紀はじめにかけては，豪華な建物の建築が進行した．第一次世界大戦直前には，世界中から多くの滞在客が訪れた．1930年末には，さまざまな施設の立地がみられた．宿泊施設は，豪華なホテル，治療設備を有するサナトリウム，さらには下宿形態の施設など多様なものからなり，全体の収容規模は，約7,300ベッドにも達していた．さらに多くの飲食施設も立地していた．

しかし，第二次世界大戦後，カルロヴィ・ヴァリをめぐる状況は大きく変化する．チェコスロヴァキアが社会主義国家となり，温泉源泉，サナトリウムやホテルをはじめとする宿泊施設の国有化が進んだ．こうした状況下，かつての「社交場」としての機能は大きく縮小し，療養機能が中心的な役割を担うようになった．療養者のほとんどは保険が適用されるチェコ人で，外国人療養客は10％程度存在したにすぎない．社会主義時代にはいくつかの施設が建設されるが，機能が優先されたもので，その景観は第二次世界大戦前からの建物とは大きく異なったものであった．

1989年に始まるヴィロード革命以後，カルロヴィ・ヴァリは大きく変化している．宿泊施設の民営化は，チェコ資本だけでなくドイツ資本やロシア資本によってなされている．また宿泊施設の整備が急激に進行した．また，パッケージツアーの開発も進むなど，市場経済に対応した経営戦略がなされつつある．その結果，カルロヴィ・ヴァリでは，第一次世界大戦前の高級なリゾートとして

の名声が復活し，多くの保養観光客が滞在するようになった．その一方で，社会主義時代に大きな地位を占めた療養機能は相対的に低下している．今日，療養客の多くは，チェコ人ではなくドイツ人やロシア人によって占められている．

カルロヴィ・ヴァリの土地利用は，宿泊施設の卓越に加え，高級商店や飲食店が多いという特徴を有している．それらは宝石店，磁器・ガラス製品店，洋品店などで構成されている．同時に，他の観光地と同様に多くの飲食施設や銀行が存在する．その一方で空き店舗や空き家の存在も目立った傾向であり，カルロヴィ・ヴァリの景観は今後も変化を示すことが予測される．

このように東欧改革以後，カルロヴィ・ヴァリの性格は大きく変化しつつある．温泉が存在することによって療養地としての特徴を有するものの，それよりも単なるリフレッシュを目的に滞在する観光客が多い保養地としての性格が強い．これには，第二次世界大戦前からの高級リゾートとしての特徴が大きく関与している．これに加えてドイツとの国境から近いという位置条件が，ドイツ人の週末観光や買い物観光の場としての性格を強めている．これらの結果，カルロヴィ・ヴァリは複数の機能を有する高級リゾートへと変化してきたと考えられる．

本稿は，平成8～10年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究・学術調査）「中央ヨーロッパにおける市場経済化の進展と地域構造の変化　－旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの事例－（代表者：小林浩二；課題番号：08041053）」および平成11～13年度文部省科学研究費補助金（基盤研究A2）「中央ヨーロッパにおける地域構造と生活様式の変化－ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの事例－（代表者：小林浩二；課題番号：11691070）」の成果の一部である．現地において，貴重な助言・協力をいただいた西ボヘミア大学のJ. Ježek講師とJ. Hofman博士，バイロイト大学のJ. Maier教授，オーストリア東・南東ヨーロッパ研究所のP. Jordan博士，オーストリアÖko-Himal研究所のD. Rachbauer研究員，貴重な資料をお貸し下さった岐阜大学の小林浩二教授に深く感謝いたします．なお本研究の一部は，2001年日本地理学会春季学術大会（敬愛大学）で発表した．

参考文献

呉羽正昭（1998）：ハンガリーにおける観光客と観光地域の変化－観光統計を用いた分析－．愛媛大学法文学部論集人文学科編，**5**，121-142.

呉羽正昭（2001）：チェコにおける観光客流動の変化－東欧改革前後を比較して－．人文地理学研究，**25**，1-36.

佐藤雪野（1989）：東欧一の湯治町．池内紀編著『西洋温泉事情』150-159，鹿島出版会.

山村順次（1990）：『世界の温泉地－温泉リゾートの発達と現状－』大明堂.

山村順次（1998）：『新版日本の温泉地－その発達・現状とあり方－』日本温泉協会.

Baláž, V. and Mitsutake, M. (1998): Japanese tourists in transition countries of Central Europe: Present behavior and future trends. *Tourism Management*, **19**, 433-443.

Bicík, I. (1996): Statute and perspectives of secondary lodging in the surrounding of Prague. In *Transformation processes of regional systems in Slovak Republic and Czech Republic*, ed. J. Mládek, 181-188, Blatislava: Univerzita Komenského.

Bicík, I. and Fialová, D. (1997): Second homes: case study Kocába region. *Acta Universitatis Carolinae, Geographica, Supplementum*, **32**, 247-253.

Hlawacek, E. (1879): *Der Wegweiser für Karlsbad und Umgebung, 4. Auflage*. Karlsbad: Feller.

Hall, D.R. ed. (1991): *Tourism and economic development in Eastern Europe and the Soviet Union*. London: Belhaven.

Hall, D.R. (1991): Evolutionary pattern of tourism development in Eastern Europe and the Soviet Union. In *Tourism and economic development in Eastern Europe and the Soviet Union*, ed. D.R. Hall, 79-115. London: Belhaven.

Hall, D. R. (1998): Central and Eastern Europe: Tourism, development and transformation. In *Tourism and economic development: European experiences, 3rd ed*, ed. A. M. Williams and G. Shaw, 345-373. Chichester: Wiley.

Holubcova, M. and Krejna, L. (1993): Future development of Czech spas. In *Europäische Kurorte: Fakten und Perspektiven*, ed. F. Stadtfeld, 121-123, Limburgerhof: FBV-Medien.

Johnson, M. (1995): Czech and Slovak tourism: Patterns, problems and prospects. *Tourism Management*, **16**, 21-28.

Jordan, P. (1990): Die Entwicklung der Fremdenverkehrsströme in Mitteleuropa (1910-1990) als Ausdruck politischer und wirtschaftlicher Veränderungen. *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft*, **132**, 144-171.

Karbus, H. (2000): *Bad Ischl und Karlsbad - Karlovy Vary: Zwei Heilbäder im Vergleich: von ihrer Entstehung, ihrem Aufschwung und ihrer Glanzzeit als Kurorte der Habsburger Monarchie, bis zu ihrem Wandel in soziale Heilzentren der Republiken Österreich und Tschechien*. Wien. (Unveröffentlichte Dissertation der Technische Universität Wien)

Köppen, B. (2000): Auswirkungen des Einkaufstourismus im nordböhmischen Grenzraum. *Europa Regional*, **8**(2), 19-31.

Langlois, S. M., Theodore, J. and Ineson, E. M. (1999): Poland: In-bound tourism from the UK. *Tourism Management*, **20**, 461-469.

Linhartová, A., Stejskal, V. und Tomásek, M. (1968): *Karlovy Vary: Stadtführer, 2. Auflage*. Praha: Olympia.

Mariot, P. (1993): Tschechoslowakei, Teil II. In *Perspektiven des Fremdenverkehrs im östlichen Mitteleuropa*, ed. P. Jordan and E. Tomasi, 37-47. Wien: Arbeitskreis für Regionalforschung.

O.V. (1940): *Karlsbad und Umgebung, 26. Auflage*. Berlin: Grieben

Simpson, F. (1999): Tourist impact in the historic centre of Prague: Resident and visitor perceptions of the historic built environment. *The Geographical Journal*, **165**, 173-183.

Williams, A. M. and Baláž, V. (2002): The Czech and Slovak tourism: Conceptual issues in the economic analysis of tourism in transition. *Tourism Management*, **23**, 37-45.

Zlamal, G. (1997): *Badewesen und Fremdenverkehr in den westböhmischen Heilbädern*. Bayreuth (Unveröffentlichte Seminararbeit der Universität Bayreuth).

Veränderung des Tourismus in Karlsbad (Karlovy Vary)

Masaaki KUREHA

Diese Arbeit beschäftigt sich mit der Frage, wie sich der tschechische Kurort Karlsbad nach der politischen und wirtschaftlichen Wende verändert hat. Karlsbad war schon im 19. Jahrhundert einer der berühmtesten Kurorte und Treffpunkt der europäischen Oberschicht. Diese Tendenz dauerte bis zum Jahr 1945 an, obwohl es einen politischen Wechsel in der Zwischenkriegszeit gab. Tourismus in Karlsbad veränderte sich aber sehr stark, nachdem die Tschechoslowakei zu einem sozialistischen Staat wurde. In der sozialistischen Zeit spielte die Kurfunktion als soziale Leistung in den verstaatlichten Sanatorien eine wesentliche Rolle. Durch die "Velvet Revolution" hat der Veränderungsprozess von Karlsbad einen anderen Weg genommen. Nach der Privatisierung der verschiedenen Einrichtungen kommen die Gäste hauptsächlich aus Deutschland und Russland, nachdem zur Zeit des Sozialismus tschechische Gäste dominierten. Im Zentralbereich in Karlsbad fällt die kommerzielle Funktion auf, insbesondere Geschäfte für Juwelen, Gläser, Porzellan, usw. Diese Artikel richten sich nicht nur an Kurgäste, sondern auch an Tagesreisende aus Deutschland. Zusammenfassend ist Karlsbad auf dem Weg der Rückkehr zum ehemaligen Ort für Geselligkeit mit Kur- und Erholungsfunktion. Dazu kommt heute noch die Funktion eines Ausflugs- und Einkaufsortes für Deutsche, aufgrund der Preisunterschiede und der guten Erreichbarkeit aus Deutschland.

Key words: tourism, resort, spa, landscape, Karlovy Vary

写真 1　カルロヴィ・ヴァリの景観
温泉地区北部高台から南部の景観．温泉地区の建物はテプラー川の谷底部に集中している．写真中央部やや右上の巨大な建物はホテル・インペリアルである．
（1999年 8 月撮影）

写真 2　カルロヴィ・ヴァリの広場
ムリンスカー・コロナーダ（写真 4）の前にある広場では，多くの人々がベンチに座りくつろいでいる．春から秋にかけてはテプラー川沿いの道は多くの人でにぎわう．
（2000年 7 月撮影）

写真 3　クアハウス I
1895年に完成したクアハウス Lázně I であるが，現在は利用されていない。カルロヴィ・ヴァリにはクアハウスが 6 棟存在するが（Lázně I-VI），2000年現在利用されているのは 3 棟のみである（Lázně III, V, VI）。
（1999年 8 月撮影）

写真4　ムリンスカー・コロナーダ
1881年に完成した豪華な飲泉場．カルロヴィ・ヴァリで最大規模であり，この建物内に5つの源泉がある．
（1997年8月撮影）

写真5　ホテル・プップ
1905年に完成したホテル．部屋数は224室，ベッド数は約420で，カルロヴィ・ヴァリでも大規模である．5星のグランドホテルと，4星のパークホテルの2棟からなる．
（1999年8月撮影）

写真6　グランドホテル・プップの入口
荘厳な造りの入口である．グランドホテル・プップの1階には喫茶店やレストランも併設されている．他の飲食店と比べると3割から5割以上値段が高い．
（1999年8月撮影）

写真 7　パークホテル・プップ

写真左の建物がパークホテル・プップで右のグランドホテル・プップとは建築様式が異なる．パークホテル・プップはグランドホテル・プップと比べるとやや安めの料金で宿泊できる．

（1999年 8 月撮影）

写真 8　ホテル・サンスーチー

1971年に，テプラー川右岸の高台中腹に新設されたホテル．現在245ベッドを有する．社会主義時代に建築された典型的な景観を呈している．

（2000年 7 月撮影）

写真 9　ヴジーデルニー・コロナーダ

写真右のヴジーデルニー・コロナーダは1975年に全面改装され，ガラス張りの近代的建築物となった．源泉を 1 つ有する．手前はテプラー川で，コロナーダはその真上に建てられている．

（1997年 8 月撮影）

写真10　ヴジーデルニー・コロナーダの内部

ガラス張りのヴジーデルニー・コロナーダの内部．写真に見える飲泉場の奥には源泉の吹き出しがみられる．このほか内部には観光案内所や売店が設けられている．

（2000年7月撮影）

写真11　ホテル・テルマル

1976年に完成したホテル・テルマルは，13階建てで，現在約470ベッドの収容規模である．会議場やレストランだけでなく，映画館や水泳用プールなど多様な設備を有する．

（2000年7月撮影）

写真12　ホテル・セントラル

温泉地区の中心部にあるホテル・セントラル．社会主義時代から存在するホテルであるが，1997年以後，源泉から引湯し療養施設を設けるなど積極的な経営を行っている．中位クラスの3星ホテルで，65部屋（約120ベッド）を有する．

（1999年8月撮影）

写真13　ホテル・ドヴォルザーク

79部屋158ベッドを有するホテル．写真から，様式の異なる隣接する建物を取り込んで改装し大規模化されたことがわかる．

（1999年8月撮影）

写真14　クアハウスⅢ

テプラー川沿いに立地する比較的大規模な建物である．医師も常駐し，さまざまな療養設備を有する．

（2000年7月撮影）

写真15　クアハウスⅢの入口

入口の看板から，喫茶店，レストラン，菓子屋も存在することがわかる．その他，床屋もあり，また宿泊も可能である．

（1999年8月撮影）

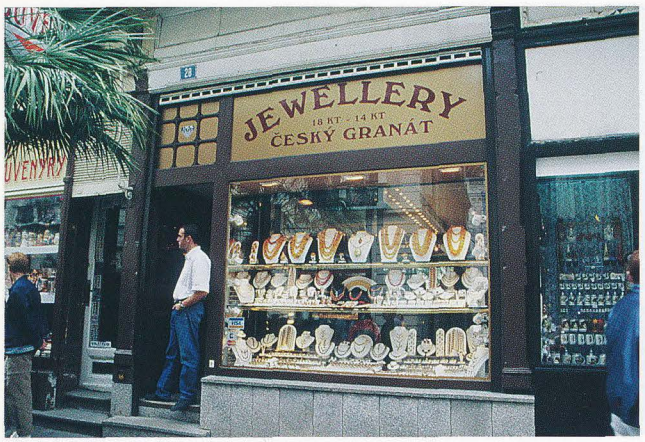


写真16　宝石店

宝石店や貴金属店は小規模なものがほとんどで，この種の店舗が非常に多い．写真内の店舗ではチェコ産ガーネットを主たる商品にしている．

（2000年７月撮影）

写真17　ガラス・陶磁器店（その１）

ガラスや陶磁器の生産は，カルロヴィ・ヴァリやその近郊の重要部門である．産地に直結して安価で製品を提供している．

（2000年７月撮影）

写真18　ガラス・陶磁器店（その２）

看板には，チェコ語でガラスと陶磁器の表記が見える．観光シーズン，とくにその週末には多くの買い物客が訪れる．

（1997年８月撮影）

写真19　ショッピングセンター

1999年に完成した3階建てのショッピングセンター・アトリウムAtrium．内部は洗練されたデザインで，51店舗からなり，洋品店や宝石・貴金属店が中心の店舗構成である．また，両替所や飲食店も存在する．

（1999年8月撮影）

写真20　喫茶店

夏季の午後には，軒先下のテラスに席を設け，多くの人でにぎわう．この写真は午前中に撮影したもの．エレファントElefantの名称は，第二次世界大戦前に同じ場所に存在したホテル名にちなんだものである．

（1999年8月撮影）

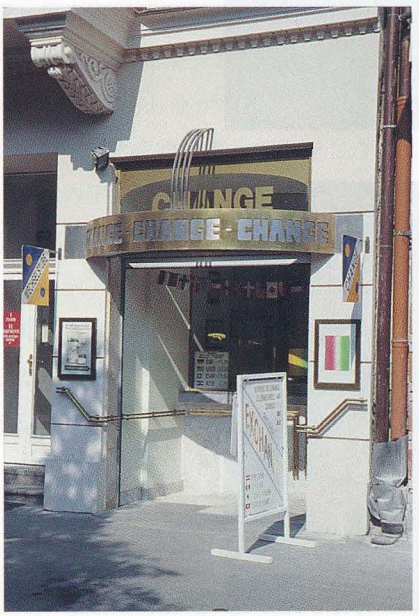


写真21　両替所

外国人訪問客が多いため両替所や銀行は必須施設である．ヨーロッパの主要な通貨とチェコの通貨との両替が可能になっている．しかし，2004年に予定されているEU加盟が実現し，チェコにユーロが導入されるとこうした金融機関の存在形態は大きく変化するであろう．

（1999年8月撮影）

写真22　空き店舗

ホテル・プップ近隣の空き店舗．窓の傷みが激しく，改装の際には大きな投資が必要となる．

（1999年8月撮影）

写真23　空き家・ブルノBrno館

テプラー川左岸の高台上にある館．この館ブルノBrnoは，社会主義時代には外国人の利用も可能なサナトリウムであったが，改革後の利用計画が実現されないまま1999年現在空き家のままで，老朽化が激しい．

（1999年8月撮影）

写真24　飲泉場

ムリンスカー・コロナーダ（写真3）内の飲泉場の1つ．持ち手がストローのように管状になった独特の形態のカップに温泉を汲んでいる．それを飲みながら散歩している人々を多く見かける．

（1999年8月撮影）